

LEGNANO  **N**

DISTRETTO DEL COMMERCIO



Città di Legnano



Unione
COMMERCIO
MILANO LEGNO MANIFATTURA E SERVIZI



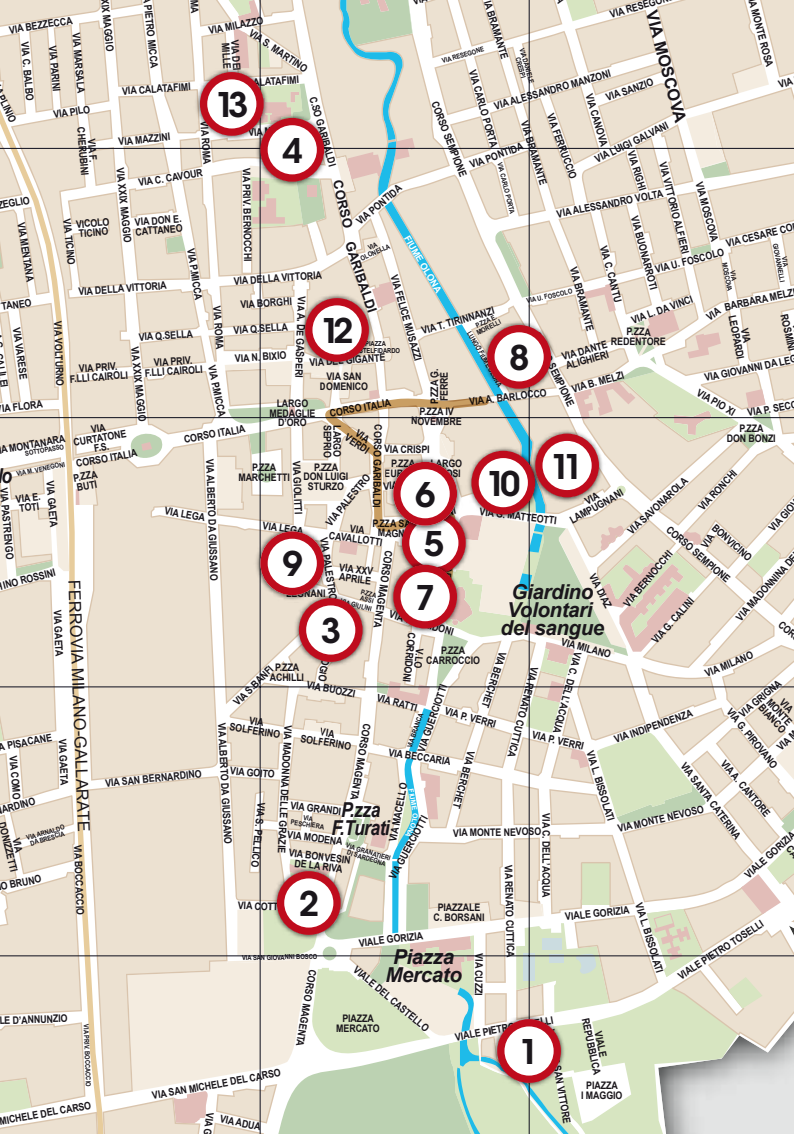
CAMERA
DI COMMERCIO
di Milano



CITTA' DI LEGNANO

観光ルート





13

4

12

8

11

10

6

5

7

9

3

2

1

Giardino
Volontari
del sangue

Piazza
Mercato

Piazza
F. Turati

観光ルート

- | | | |
|---|--------------------|----|
| ① | サン・ジョルジョ城 | 5 |
| ② | 巡礼聖堂マリア・デッレ・グラッツイエ | 6 |
| ③ | 聖サンブロージョ教会 | 7 |
| ④ | 聖マーニョ聖堂 | 8 |
| ⑤ | マリンヴェルニ邸 | 9 |
| ⑥ | マリンヴェルニ邸 | 10 |
| ⑦ | 大司教館 | 12 |
| ⑧ | カントーニ居住区とそのエリア | 13 |
| ⑨ | マニファットウーラ・デイ・レニャーノ | 14 |
| ⑩ | ⑪ 主の館 | 16 |
| ⑫ | コロンベーラ塔 | 17 |
| ⑬ | ガイド・スーテルマイステル市立博物館 | 18 |





レニャーノ商業管区は、商業の再活性化を目的に地方行政団体、商工会議所および商業連合会といった様々な役割を持った組織の協力関係により生まれました。文化、芸術、歴史が街角で交差するこの町は、訪れる人たちへ楽しいショッピングやレジャーを提供しています。私たちの町は、その地名と同名の戦いに関わる歴史に因んだパリオで知られ、個性溢れ建築学的にみても素晴らしいスポットが数多く存在しています。町を訪れてみたいと思ったら、個人的に情報収集も可能なら、観光コースを提案するアプリによる検索も容易に可能です。 www.legnanoon.it をナビゲートし、アプリをダウンロードすることにより、観光コースのフォトギャラリーを見たり、無数にあるショップを検索したり、宿泊施設、飲食店や娯楽施設など、おもてなしスポットの情報を得ることができます。

インターネットのサイト上の情報

<http://www.legnanoon.it>

<http://cultura.legnano.org>

<http://www.parrocchiasanmagno.it>

<http://www.sandomenicolegnano.com>

<http://www.paliodilegnano.it>

サン・ジョルジョ城

via Cuzzi (viale Pietro Toselli)
<http://cultura.legnano.org>



レニャーノ(Legnano)の南部の現在この城がある場所は、古文書によると、13年には聖ジョルジョ(S. Giorgio)に奉献した小教会と、そばに聖アゴスチノ会系(frati agostiniani)修道院があった。

1261年代の後期、ミラノで勢力を増していたデッラ・トルレ家(Della Torre)は教会、修道院とその周辺の土地を交換条件のもと譲渡された。

当時の編年史をみてもこの城を建設し始めたのはデッラ・トルレ家(Torriani)かどうかという明確な記述は残っていないが、1273年に同家がイギリス君主エドワード1世とエレオノーラ(Edoardo I ed Eleonora)をレニャーノ(Legnano)のこの城でもてなした事はよく知られている。

当時のこの城はおそらく長方形の基礎の上の一つの塔で成り立っていたと思われ、後に二つの2階建ての建造物が増築された。この部分の建物は、現在でも中央門向って右側に見ることができる。ヴィスコンティ家(Visconti)によりデッラ・トルレ家(Della Torre)が失脚させられると、城はミラノ(Milano)の新司教オットーネ(Ottone)の手に渡った。ヴィスコンティ家(Visconti)は城塞としての構造強化の工事を始め、1437年、フィリッポ・マリア(Filippo Maria)がオールドラード二世・ランプニャーニ(Oldrado II Lampugnani)に寄贈するまで同家が所有していた。1445年、ミラノ(Milano)の領主は、オールドラード(Oldrado)にこの城の拡張工事を許可したが、これにより城に守備構造が加えられ、中央入り口と鳴門に跳ね橋、教皇派型狭間胸壁、右翼部各四方隅の銃眼付円筒形塔、堤防を施した長城などで、これにより要塞性を湛えた館の主となった。

オールドラード(Oldrado)が1460年に亡くなると、この城を含む彼の全ての財産は彼の孫ジョヴァンニ・アンドレア(Giovanni Andrea)が相続し、彼から更にクリストフォロとオールドラード3世(Cristoforo e Oldrado III)という息子たちに譲られた。この城の装飾と改修を最後に行ったのはこの時代であったが、1524年、フランスとドイツの戦争により、両軍隊から損害を与えられた。1528年からは相続をめぐり、フランチェスコ・マリア・ランプニャーニ(Francesco Maria Lampugnani)がその正当性を認められるまで、長い紛争が続いたが、彼はミラノ(Milano)のマッジオーレ病院(Ospedale Maggiore)にその相続権を譲った。

1798年にはカルロ・クリストフォロ・コルナッジャ侯爵(marchese Carlo Cristoforo Cornaggia)への売却が証書となって記録されている。

その後、サン・ジョルジョ城は城塞として用いられることはなくなり、20世紀には農業事業体になってしまった。

レニャーノ市(Comune di Legnano)の所有となってからの歴史はごく浅く1973年から、それから補修と改築が始まった。

現在は、内部にガエタノ・プレヴィアーティ(Gaetano Prevati)のレニャーノ(Legnano)の戦い三部作やウーゴ・リーヴァ(Ugo Riva)の彫刻、またバリオのためのマント、衣装や宝飾品の展示室などを備えた展示館本部となっている。



巡礼聖堂マリア・デルレ・グラッツィエ corso Magenta <http://www.parrocchiasanmagno.it>

1610年、枢機卿フェデリーコ・ボッロメオ(Federico Borromeo)の承認を受け、ノヴァーラ(Novara)の建築家アントニオ・パレア(Antonio Parea)により新たな巡礼地の建設が始まった。

これには40年の歳月を要し、始めはフランチェスコ・マリア・リキーニ技師(l'ing. Francesco Maria Richini)、次いで建築家バルカ・ディ・ゲンメ(l'arch. Barca di Ghemme)らによって現在のような身廊に3部の礼拝堂を持った構造の教会が造り上げられた。ファサードには、2本の柱に支えられた大きなアーケードが設けられていたが、1863年のファサード改築中に取り壊され、現在のような煉瓦づくりのアーケードとなっている。同教会には芸術作品が豊かで、特に祭壇の金の装飾や、聖母マリアのフレスコ画が注目を集めている。壁面には受胎告知と聖母訪問を表したフランチェスコ・ランプニャーニ(Francesco Lampugnani)による2枚の絵画が現存している。

クーボラと礼拝堂に見られるフレスコ画や絵画なども貴重である。

この巡礼地を取り囲む庭園には半円形を描くように15の礼拝堂が建てられているが、元々は1895/97年作のクレモナの(cremonese)画家バッケッタ(Bacchetta)によるフレスコ画が描かれていた。

巡礼聖堂後部、アプシデには中央に幼子イエスを抱いた美しいロザリオのマドンナを配した礼拝堂が、1899年カノッサの(Canossiana)貴族、バルバラ・メルツイ(Barbara Melzi)に捧げるため建立された。



聖アンブロジーノ教会

via Sant'Ambrogio

<http://www.parrocchiasanmagno.it>



レニャーノ (Legnano)におけるキリスト教の定着について、最も古い証言としてこの聖アンブロジーノ教会(chiesa di Sant' Ambrogio)がある。改修目的の発掘調査で掘削の始まる1984年から終了する1991年までの間に半円形のアプシデが姿を現した。

この建物は、教世紀の流れの中で複雑な改造を施されたが、それは基礎が1587年に築かれたため、その後この教会の原形はほぼ完全に壊され、残ったのは高い鐘楼のみであった。さらに広くなった新教会の建物は、1740年に大きな身廊とくりぬかれた窓のドーム型ヴォールトを備えて建設された。

1618年にはこれら全ての建設工事が終了し、教会のフレスコ画装飾の命令が出され、仕事を請け負ったのはジョヴァンニ (Giovanni)とフランチェスコ(Francesco Battista)というパツィッスタ・ランプニャーニ家の兄弟(fratelli Lampugnani)であった。

この兄弟は、リュネットにかなり険しい表情の8人の預言者を描き、大祭壇の絵画には幼子イエスと聖母マリア、聖カルロ、聖アンブロジーノそして聖フランチェスコの姿を描いている。アプシデ奥の壁面は、1700年代の価値ある遠近画法を用いて飾られ背景の深みが増し、さらに天使たちに囲まれた聖マグダラのマリアが描かれ、祭壇右側に配置されている。

身廊の真ん中付近、アーチ支柱には、1740年に聖ビアジョと聖イラリオの姿がフレスコ画で描かれ、また教会入り口を起

点に作者不明の様々な油絵が並んでいる。

左側には、聖体拝領を司るヴェルチェッリ

(Vercelli)の司教、聖オノラートと聖

アンブロジーノを描いた絵画がある。

右側にはさらに、栄光の聖アンブロジーノ、膝に幼子イエスを抱き王座に就く聖母などの絵画があり、身廊の真ん

中付近、同じく右側にはもう現存してい

ないレニャーノの旧墓地の中央礼拝堂

にあった1700年代の十字架が認めら

れる。また、右壁、左壁の両方にランプ

ニャーニ家を代表する大きなフレスコ

画、馬に跨る聖アンブロジーノがある。

ファサード裏のバルコニーにある教会

オルガンは、アントニオ・デ・シモー

ニ-カッレーラ (Antonio De Simoni-

Carrera)の貴重な作品で、今日まで

一切の手を加えることなく元の外観

が現存している。





聖ドメニコ教会

via Giuseppe Mazzini

<http://www.sandomenicolegnano.com>

もともと聖ドメニコ教会 (chiesa di San Domenico) の場所には、皮なめし工場が建つはずだったが、司祭ドン・エマヌエレ・カッタネオ (don Emanuele Cattaneo) がこの計画に反対した。

サン・ドメニコ地区 (rione di San Domenico) には小さな礼拝堂があったが、この地区の住人の信仰のために拡張し改築するため1900年4月、本格的教会工事が始まった。1904年11月、大きな2連窓を備えた八角形のクーポラが建てられ、尖塔には贖い主イエス・キリストの銅製金メッキの像が建てられた。

その為の費用の大部分はサン・マーニョ教区主任司祭 (parroco di San Magno) であったドメニコ・ジャンニ師 (monsignor Domenico Gianni) ほかにレニャーノ (Legnano) の博愛心豊かな数名が負担した。この教区はミラノ (Milano) の大司教であったアンドレア・フェッラーリ枢機卿 (Cardinal Andrea Ferrari) により設立され翌年に聖別が行われた。鐘楼は、1924年に建てられ、40mの高さがあり、ルネッサンス様式で、内部には動力土台のついたアンブロジーオ方式の釣り鐘7つが設置されている。

1925年にはロマネスク様式の外装改修、四福音書を記した使徒を表すライオン (聖マルコ)、天使 (聖マタイ)、牛 (聖ルカ) と鷹 (聖ヨハネ) の像が置かれた。

教会は、クラシックなラテン十字形、3廊式に翼廊を持つという特徴を備え、祭壇にはサンタンジェロ地区で見つかった同名のサンタンジェロ修道士会修道院 (Il convento dei frati di Sant' Angelo) の教会の十字架がかけられている。

同教会は、グズマン (Guzmán) の聖ドメニコ (San Domenico) に奉献された。



聖マーニョ聖堂

piazza San Magno

<http://www.parrocchiasanmagno.it>



聖マーニョ聖堂(La Basilica di San Magno)は、元は聖サルバトーレ教会(chiesa di San Salvatore)があった場所へ、1504年5月4日に建設が始められ、1529年12月15日に聖別をみた。平面図中央部にはブラマンテ(Bramante)を思い起こさせる様式であるが、当然この聖堂の建築家は直接的な影響を受けている。

ファサードはフランチェスコ・マリア・リッキーニ(Francesco Maria Richini)が様々な個所の設計を行ったが、600年代初めの数十年間で完成し、表面は煉瓦造りで壁面と窓にはレリーフが施されている。鐘楼は、前身の教会のものであったのが、新たに現在のものに変えられたのは1752年のことだ。平面図は八角形で、主要軸に沿って、短くつないでいる突出部が十字を形作り、各角には4組の天井の低い礼拝堂が設置されている。クーボラは、1500年代のもので、パラスタスの要素に似た装飾が施され、燭台の複雑な造りはレース状のカットワークを思わせる。この聖堂は、800世紀半ばからから20世紀にかけて改修された。1914年に入り口のアトリオの延長により外部が修正された。

ルネッサンス期の作品について簡単な解説

アプシデ中央のフレスコ画は1562-64年、ジョヴァン・マルティノー・カーザ(Giovan Martino Casa)の協力でベルナルディーノ・ラーニーノ(Bernardino Lanino)により描かれた。アーチ型天井の中心には祝福を受ける聖マーニョの姿が見られる。

壁面にはイエスの幼少のシーンが描かれている。幼子イエスを抱く聖母と聖人たちの姿の描いた大祭壇画は1523年にベルナルディーノ・ルイーニ(Bernardino Luini)によって画かれた。ティンパヌムからは永久の父がこちらを見下ろしている。脇の4つの区分には跪く人が描かれており、上部は洗礼者ヨハネと聖ピエトロ、下部には聖マーニョと聖アンブロジーヨである。祭壇画下部、プレデッラには単色で十字架への釘づけ、キリスト降架、復活、エンマウスでのエピソードと贖罪をテーマにしたものが描かれている他、その間を埋葬されたキリストや福音書を書いた使徒たちの姿がつかない。木造の合唱部は16世紀末のコリオ兄弟の作と考えられている。処女マリアの礼拝堂に保存された祭壇画は、16世紀、ジャンピエトリノ(Giampietrino)により描かれ、福音記者ヨハネ、聖ジュゼッペそして高部に天使に囲まれたキリストという3部作により成り立っている。中央の壁龕にはテンプルの上には1700年代の処女マリアの木製の像が、元々あった絵画に代えて安置されている。プレデッラには左から順に聖アンナに良い知らせをもたらすジョアッキーノ、聖母マリア誕生、聖母マリアの奉獻が描かれている。16世紀にまでさかのぼる聖アグネゼ礼拝堂(cappella di Sant' Agnese)のフレスコ画も存在するが、元々この礼拝堂は、聖堂の建設の資金をヴィズマラ家(Vismara)と共に出したランプニャーニ家(famiglia Lampugnani)個人のもので、アトリオの装飾も同時代のものだ。また、オルガンは1542年にアンテニャーティ家(famiglia Antegnati)により演奏されたが、19世紀から20世紀にかけて幾度も改造されている。



マリンヴェルニ邸
piazza San Magno
<http://www.legnanoon.it>

1800年代から1900年代まで、設立の歴史

レニャーノ (Legnano) は、イタリアの行政区として宣言したのは 1804年、ナポレオン・ボナパルト(Napoleone Bonaparte)の発意によるものであったが、それが承認されたのは 1815 年、オーストリア政府からだ。ファビオ・ヴィニャーティ (Fabio Vignati) による 3期の行政支配期のうちの第一番目です。すでにこの町のランクは高くなった。1924 年 8 月 15 日付イタリア王国の王室証書はヴィットリオ・エマヌエレ 3世 (Vittorio Emanuele III) が署名をし、副署はムッソリーニ (Mussolini) が行っているほどである。

市庁舎の歴史はそのままコルナツジャ家 (Cornaggia) の歴史でもあり、彼らの館のいくつかに初期の庁舎本部を置くこととなったが、建築家マリンヴェルニ (Malinverni) が新たな市庁舎本部の建設企画選考で勝利し、同邸は、その当時から近年に至るまで、数名の芸術家による作品でさらに美しく飾られてきた。

市庁舎本部は、1862年以前はコルナツジャ (Cornaggia) 侯爵が個人で所有する古い家屋に作られ、その場所は現在の聖マーニョ広場 (INA) ギャラリーが建っている。

市役所オフィスは地上階の一部屋という小さなものだったが、後に二階の二か所が加えられた。

最終的に本部として威厳があり、使える庁舎を待ち望む声に、市庁舎は一時的にカロッツォ広場 (piazza Carroccio) におかれたが、同じくコルナツジャ侯爵所有の建物で、この場所は当時、『(piassö di püii) (ピアッソ・ディ・ピュイ)』つまり鶏の広場と呼ばれ、市はこの館を小学校と国立警備本部としても使用できるよう借り受けた。

最終的には市民行政機関として、当時のマジジョレ広場 (piazza Maggiore) からラーネーノ小路 (vicolo Lanino) まで広がり、現在のエウローパ広場 (piazza Europa) にある E. クラメル (E. Cramer & C.) 社所有の紡績工場を購入、必要な改修を行い、市のオフィスと小学校がこの古い工場であった建物に移転した。

その後、人口の著しい増加によりオフィスと行政サービスの完全な再編成が必要になり、同じ場所に新たな市庁舎を建設することとなった。

館の歴史を簡単に紹介

新たな館を造るべく、900 年代初期選考会の開催が当時の最も優秀な建築家らに公示された。

1904 年 9月12日、市議会は公募の公示を承認、翌年1月31 日に締め切った。11件の応募の中から、技術選考委員会は、建築家アリスティデ・マリンヴェルニ (Aristide Malinverni) のものを選んだ。

彼の設計は、3階建ての建物に、窓には尖塔迫持のあるゴシック様式のアーチに、オフィス内部には帆形アーチを取り込むなどロンバルディア・ネオ中世様式のほか、リバティー様式などその他の様式の要素とされるものを取り込んで折衷主義を提案した。

また装飾のモチーフはこの町の過去の歴史を語るものであった。



議会室はその全体を掻き絵でイタリアの様々な都市の紋章で飾っている。
正面玄関のポーチには、モナメント広場 (piazza Monumento) に置かれているエンリーコ・ブッティ (Enrico Butti) によるレニャーノの勇者の記念碑が薄肉彫りで再現されている。
また掻き絵の装飾は、その全てがギリンゲッリ (Ghiringhelli) の画家たちによるもので、アーケードのヴォールトも同様の装飾が施されている。
この建造の定礎式は1908年8月10日で、翌年10月には元紡績工場脇の空地に庁舎の第1部分が完成した。
そして竣工式が、1909年11月28日に建物の完璧な姿の前で行われた。
市庁舎の本部は今日でもその設計者の名に因み、マリンヴェルニ館 (Palazzo Malinverni) と呼ばれている、
その後もいくつかの拡張工事が2000年まで行われた。
館の廊下やオフィス内には様々な時代の油絵が展示されている。



大司教館

via Mons. E. Gilardelli - c.so Magenta
<http://cultura.legnano.org>

大司教が住居とした複数の館は、おそらくはコッタ家 (famiglia Cotta) が11世紀に建てたレニャーノ (Legnano) で最も古い城の隣はあるいはその周辺に作られていたらしい。この小要塞の基礎に堅固な城壁の一区間が含まれていたようで、XXV アプリーレ通りで目の目をみた。

ミラノ (Milano) の大司教レオーネ・ダ・ペレゴ (Leone da Perego) は、ミラノ (Milano) の貴族たちと政治家たちの間で戦いのあった1241年から1257年まで幾度となくこのレニャーノ (Legnano) に非難していた。

その深刻な状況が、ジラルデッリ通り (via Gilardelli) に面した館への大司教の滞在を余儀なくし、城下町を要塞化するための工事が必要になったと思われる。実際、考古学発掘により13世紀半ば、レニャーノの周囲には堀が掘られていたことがわかっている。

レオン・ダ・ペレゴ (Leone da Perego) の死後は大司教にオットーネ・ヴィスコンティ (Ottone Visconti) が選出されたが、彼がこの館の中庭に面した右翼部分を建設した。

大司教館本間の城壁には今でもヴィスコンティ家の紋章を二つ見ることができる。

一つ目は、入り口のアーチに塗り込められた石碑で、十字架によって掲げられた頭部があり、オットーネが大司教の任を与えられたことを暗示している。そしてもう一つはヴィスコンティ家を示す蛇で、アーチの鍵にもつけられ、現在はレオン・ダ・ペレゴ館 (palazzo di Leone da Perego) の裏に取り付けられている。

おそらくこれもオットーネによるものとされるのは、彼の一家ヴィスコンティとデッラ・トルレ家 (Torriani) の紛争があった時期に、城下町の周囲に防備用城壁を以前にあった堀に沿って建設した。1951年にマジェンタ通り (corso Magenta) 少し西でその一部が発見された。

二つの大司教館は、1800年代の終わりに大きく改装され、レオン・ダ・ペレゴ館 (palazzo di Leone da Perego) は幼稚園、そして文化協会の本部になり、現在はレニャーノの文化季節展示館の本部となっており、オットーネ館 (palazzo di Ottone) は会議場として利用されていたが現在はチネマ・ラッティ (cinema Ratti) として利用されている。



カントーニ居住区とそのエリア

corso Sempione

<http://www.legnanoon.it>



1700年、カントーニ家が織物売買の事業を始め、1820年にはガッララーテ (Gallarate) のオローナ川 (Olona) 沿いに工場を増やし綿織物生産を始めた。

レニャーノ (Legnano) には1829年に紡績工場、次いで織物工場と小規模の染色工場を設立した。特にエウジェニオ・カントーニ (Eugenio Cantoni) は、幾度も海外に滞在し、繊維産業分野の技術発展に関心を持ち一家の企業経営に弾みをつけた。その成果は1869年、彼の開発した直流式染色機械システムがパリ博覧会で金賞を受賞したことにみられる。1872年、カントーニ社は、綿織物業界ではじめて株式企業形態を取り入れ、株式会社カントーニ綿織物工場 (S.A. Cotonificio Cantoni) となりアンドレア・ポンティを初代社長に迎えた。

同綿織物工場が最も大きな規模拡大を遂げたのは20世紀初頭である。

この時期には紡績設備はカステッランツァ (Castellanza) に移転し、レニャーノ (Legnano) は織機部門と染色部門の工場に絞られた。

900年のカルロ・ユッケル (Carlo Jucker) はキーパーソンであり、規模拡大と機器の近代化の擁護者で、同社の発展におおいに貢献し、それは戦時中も止まることを知らなかった。1931年にはピロード生産のための新館が落成し、建築的観点から最も重要で代表的な建造物となった。しかし、この綿織物工場の規模拡大により、レニャレッロ (Legnarello) の古い家屋は損害を被った。最も大きな損失は、1927年のランプニャーニ家 (Lampugnani) 古い荘園のものだった。60年代には会社の経営危機が始まり、カントーニ綿織物工場の歴史ある工場は1985年に閉鎖されることになった。2009年この織物工場の跡地には、ショッピングセンター『ガッレリア・カントーニ (Gallerie Cantoni)』がオープンした。このエリアは、サービス業、居住地区、緑地帯に近く、町の市街地そしてセンピオーネ通りとを短時間でアクセスできるピロード生産工場棟の正面部分が唯一、綿織物工場の建物の中で取り壊しを免れた部分となって残っている。

カントーニ居住区

第1の規模拡大を900年代始めの10年間にみたカントーニ綿織物工場は、従業員が1500人以上にまでになり、1350機の織機が稼働していた。その労働力確保の必要に答えるため、同企業は1908年から労働者用住宅の建設を始め、1925年には114戸の住宅と456棟のアパートを造った。ガルヴァーニ通り (Galvani) モスコヴァ通り (Moscovia) そしてヴォルタ通り (Volta) にまたがるこの地区は、カントーニ居住区 (Villaggio Cantoni) と名付けられ、20年代に造られた。このエリアには、わずか5年の間に、作業員用に2棟の大きな3階建てアパート住宅、事務職員用に全てがアングロサクソン風の各棟が6戸の庭付きアパートのほか、管理職らには一戸建てヴィラが用意された。1928年には従業員の子弟用幼稚園、ジム、レクリエーション施設をオープンさせた



マニファットウーラ・ディ・レニャーノ via Lega <http://www.legnanoon.it>

マニファットウーラ・ディ・レニャーノ社 (Manifattura di Legnano) はバンフィ兄弟 (fratelli Banfi) とジュゼッペ・フルア (Giuseppe Frua)、マリアーノ・デッレ・ピアーネ (Mariano delle Piane) が共同し設立された。

彼らは市内中心部に高級エジプト綿のみを使用した紡績を行う新工場を建設し、オローナ川 (fiume Olona) の水を使用して自社用の水路を引くことにより、生産行程で必要とする蒸気圧縮を行った。

産業センサスによると1911年には作業員 755 名が63.500本の紡錘の稼働にあたっていたとのデータが残っている。

生産部門で最も代表的な建物は、本玄関の正面にある綿糸紡績部で、横長の平屋の工場が続きその中にいくつかの2階建の塔が見える。

これに隣接してサービス部門と生産準備部があり、煙突を備えた発熱センターがある。この発熱センターは、この種類のものでは市内に唯一現存し、今では産業発展全盛期のシンボルとなっている。

同社は作業員住宅をいち早く整えた企業としても知られており、切妻屋根の工場に囲まれ、保育園や寄宿舎、礼拝堂が立ち並び、現存していないが、中庭付き作業員用住宅も存在していた。これはフランスやイギリスの啓蒙主義者や社会主義者から影響されたものである。

建物の特徴としては、外観の煉瓦仕上げ、紡績の階は広いスペースを確保する目的で磚物製支柱や梁を用いられ、建築上の見栄えの悪さを隠すためにシェード (天井窓) 付のこぎり屋根は細かな模様の欄干が張り出し、周囲の壁には上部に装飾付きのコーニスで一段低くなったアーチが挿入されており、外壁はつなぎ梁や雨どいが建築的效果をもたらしている。周囲の塔は平屋建ての建物から一段高く、保全作業や製品の移動に用いられ、平面構造の塔の屋根部分は、蒸気圧縮用の水が円滑に使用できる工夫がされている。大きな窓は下層階と同じ仕様だが、二連あるいは三連窓となっている。

この建物は、ヴォールトと支柱で支えられた興味深い地下構造で、いくつかの通路が入り組んだような構成になっている。

工場施設案内の終わりにまだ事務所となっている建物があるが、こちらは建設された当時のままの構造で、一本の廊下に面し事務室が並んでおり、階段は20世紀初めの完全な様式を保っている。

従業員が仕事を一旦離れて利用する福祉施設の中では、寄宿舎が最も重要な部分を見せている。

直線的な造りの切妻屋根3階建てで、共同寝室の床と梁は木製である。

玄関は様式的には建物の他の部分とは違い、ポーチと御影石の支柱を用い、800年代のロンバルディアの典型的家屋からインスピレーションを得た造りとなっている。

保育園、礼拝堂、修道女の宿舎が占めていた部分は時を経て技術ラボラトリーに転用された。



主の館

via Giacomo Matteotti

<http://www.legnanoon.it>



ユッケル邸 (Villa Jucker) は、その名をカントーニ綿織物工場の経営陣であり企業家であった一家の名に因んでつけられ、90年代初頭、館の完成当時から住んでいた。設計は、ジュリオ・ブリーニ (Giulio Brini) とシモーネ・ロヴェーダ (Simone Roveda) による。

1976 年にはこのヴィラは、文化協会ファミリア・レニャネーゼ (Famiglia Legnanese) に貸し出され、同協会はその3年後にこの建物を綿織物工場カントーニ株式会社から買い取り、1983 年にはチェーザレ・クローチ・カンディアーニ技師 (ing. Cesare Croci Candiani) の設計で拡張工事を行った。

庭園にはユッケル家のカルロとジャン・フランコ (Carlo e Gian Franco Jucker) の二人の胸像 (フランチェスコ・ドッティ (Francesco Dotti) 1976年作) を設置、後に2つの銅像群と産業考古学遺産数点が置かれた。

この建物は、90年代初頭の中産階級による邸宅の典型的な例となっており、規模としては中級程度の2階建てで、エレガントで華やかな装飾が施され、建てられた当時は 5.000 m² の庭園で囲まれていた。同じ通りにはヴィラ・ラッツァーティ・ボンベッリ (Villa Lazzatti Bombelli) があり、1904 年に建設され、デッラックワ兄弟 (fratelli Dell'Acqua) という同名の織物メーカーを持つ兄弟が住んでいた。



コロンベラ塔

via del Gigante

<http://www.legnanoon.it>



この塔は推定で15世紀半ばに造られたとされており、昔はこの細長い形の建物は鳩の飼育に用いられていたことからこの名がついた。1934年、グイド・スーテルマイスター (Guido Sutermeister) がこの建物の全壁がフレスコ画で覆われていたことを発見した。

一階は、天井下に帯状に幅広く螺旋模様とヒポグリフ、ランプニャーニ家 (Lampugnani) セスティ家 (Sesti) ヴィスコンティ家 (Visconti), アンノーニ家 (Annoni), ポッロ家 (Porro) そして アルコナーティ家 (Arconati) の紋章を掲げた模様で飾られている。それらの紋章の配置順や暖炉上の装飾に貴族の盾 (一階部分のものは今日でも認められる) が掻き絵で描かれたものが新たに発見されたことから、研究者は、この建造物の建築依頼者がランプニャーニ家 (famiglia Lampugnani) であったと特定した。建物と絵画は1972年と1990年に修復され、上階は、貴族の紋章のコーニス、壁面は情景画で飾られていた。フレスコ画の剥ぎ取りは上階だけに限られた。というのは下階の装飾は、外部の水車の絵と同様、すでにほとんどが残っていないからである。現在、オリジナルのフレスコ画の他にも、コロンベラの塔 (Colombera) 内部では、1900年頃、倒壊したこの町の建物にあったルネッサンス期の絵画も観ることができる。

フレスコ画を簡単に解説

現在のイタリア通り (corso Italia) 沿いにあり1934-36年に取り壊されたヴィズマール邸 (casa Vismara) については、いくつかの断片が残った。

舞踏室は、音楽家、踊り子、守護聖人と共にいる同一家の肖像画の姿で飾られている。

『侯爵の冠の間』は緑の枝の飾りが一面に、冠と煉瓦模様が浮き出るように描かれている。この家が建てられた1043年の日付が目立つように描かれている。天井下の壁面には、家族の紋章と胸像が交互に帯状に描かれている。そして部屋の4分の1の部分は狩猟の場面のフレスコ画である。4人の福音書の著者が玄関の入り口のアーチを飾るコロオ邸 (casa Corio) は、現在の センピオーネ道沿いに建っていたが、今日でも部分的に保存されている。ランプニャーニ荘園 (Maniero Lampugnani) またの名を『偉大な家』はセンピオーネ通りの聖母の清め教会 付近に建っていた。この荘園は1419年、フィリッポ・マリア・ヴィスコンティ (Filippo Maria Visconti) の個人教師かつ顧問であったオルランド2世ランプニャーニ (Orlando II Lampugnani) に買い取られた。応接室には、同家やクリヴェッリ家 (Crivelli) の紋章のコーニス、壁面には菱形で中央に陽光を放つ、花飾りとザクロで囲まれた太陽のタペストリーがあったが、その破片がコロンベラの塔 (Colombera) の一階に保存されている。この応接室は二つに区切られており、コロンベラの塔 (Colombera) にもともとあったフレスコ画を展示している。貴族の紋章の装飾用コーニスは、今では解説が難しくなっている。壁面の二つは薄れており、古代ローマ時代の英雄たちの名場面が描かれているが、そのイコノグラフィーとしての意味は今日も明確な解釈ができていない。



ガイド・スーテルマイステル市立博物館

c.so Garibaldi

<http://cultura.legnano.org>

レニャーノの (Legnano) の市立博物館は、2400年に正式にロンバルディア州政府 (Regione Lombardia) に公認されたが、これは設立者ガイド・スーテルマイステル (Guido Sutermeister) が1925年から1964年までの間、この地域や近隣の歴史的・美術的記録を集め、記録にまとめ、保存するという情熱を込めた研究の成果だ。

博物館となった建物は1928年に建てられた旧小さき兄弟会系サンタンジェロ修道院 (antico convento dei frati minori di Sant' Angelo) の敷地内に建てられ、1400年代のミラノの貴族、ランプニャーニ家 (Lampugnani) がおそらくは余暇を楽しむために使用していた屋敷の平面図をもとに設計された。

この屋敷は元々、オローナ川 (fiume Olona) の対外、現在のセンピオーネ通り (corso Sempione) に位置していたが、900年の始めに壊されてしまった。しかし、スーテルマイステル (Sutermeister) は新築する際に、その建物の格天井部分とアーケードの支柱など可能な限りを再利用することができた。さらに、内部外部の空間にフレスコ画で装飾も提案したが、そのオリジナルは現在『コロンベラの塔 (Torre Colombera)』という博物館に保存されている。アーケードには、古代から古代末期 (I-V 紀元後1から5世紀) の石碑物、14-15世紀の貴族の紋章が刻まれた暖炉の上の飾り棚、中世からルネッサンス期にかけての宗教建築物の一部であった断片などが置かれている。

展示室を簡単に解説

地上階は『沈黙の古代』という展示室が広がっており、1928年から1993年まで行われたパラビアゴ (Parabiago) での発掘で見つかったものが保存されている。

埋葬物の発掘は年代順に紹介することで、ローマ共和国時代から帝国時代全盛期 (紀元前1世紀から紀元後2世紀) までの発掘場所周辺の文化及び歴史の変遷が理解できるようになっている。上階の小書斎は『コレクションの間』としてギリシャ、マグナ・グラエキア、エトルリアそして古代ローマ時代 (紀元前9世紀-紀元後3世紀) の発掘物を展示している。この展示の目的は、直感的な想像力を用い、考古学的価値のある物を個人の住宅に配置すること、ルネッサンス期の中央ヨーロッパ主要国でとても好まれた一種の『ヴンデルカンメルン (wunderkammern)』つまり『不思議の部屋』の再構築を目的にしている。

『名誉の大広間』ではベルナーテ・ティチーノ (Bernate Ticino) の墓地で見つかった発掘物を展示している。見学順路を追っていくと、近年発見された古墳のエリアに入るが、紀元前3世紀から2世紀初めの珍しいガリア人の埋葬地、ローマ帝国時代全盛期 (紀元後1世紀) の頃の墓地、ローマ帝国時代後期 (紀元後3から4世紀) の発掘物や興味深い埋葬服飾物を含むかなりの数の埋葬品を見ることができる。

この邸宅にはレニャーノ (Legnano) やオローナ渓谷中部 (media Valle Olona) 付近で、複数回にわたる発掘調査での考古学的発見物が保存され、青銅器時代からロンゴバルド期 (紀元前2500世紀から紀元後700世紀まで) にわたる発展に伴う人々の定住の動きを紹介する展示となっている。

塔の部分では価値ある貨幣のコレクション
を見ることができる。この博物館に保存さ
れている財産を代表するものとして古代の
貨幣（紀元前7世紀から紀元後8世紀頃の
古代ギリシャ、ローマ、ビザンチン時代の
代表的なもの）あるいは近代のもの（紀元
後9世紀から1780年頃の中世の時代から
オーストリアのマリア・テレジアの改革の
頃までにミラノ造幣所で発行されたもの。）
などがある。



